

幼児期の教育と小学校教育をつなぐカリキュラムに関する考察

A Study on the curriculum that connects childhood education and elementary school education

成田 頼昭*・山田ゆかり**・若林 一哉***・上野 秀人****

Yoriaki NARITA*・Yukari YAMADA**・Kazuya WAKABAYASHI***・Hideto UENO****

要旨

幼保小連携推進には、相互理解、連携の在り方や円滑な接続の在り方の検討が課題だ。接続期を設定し、幼保のアプローチカリキュラムと小学校のスタートカリキュラムによる教育活動で円滑な接続を図ることが重要である。H市では調査研究事業とその成果を基にした行政通知で連携推進を図った。

スタートカリキュラムの編成・実施は、学校の指導計画及び校内組織に位置付けて前年度から計画づくりに取り組む。週案形式で、週のねらい、学校行事等、楽しい活動、生活科中心の学習、教科のスタート学習で作成する。全教職員による協力体制を組み、P D C Aサイクルで改善を図っていくことが重要である。

キーワード：スタートカリキュラム、アプローチカリキュラム、幼保小連携、接続期、調査研究事業

I はじめに

1 求められる幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続

平成21年度に全面実施された幼稚園教育要領及び保育所保育指針、平成23年度に全面実施された小学校学習指導要領において、幼児期の教育と小学校教育の接続や連携が次のように規定された^{1) 2) 3)}。

「幼稚園教育要領」(平成20年3月) (下線成田)
第3章 第1の2
(5) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、(中略) 連携を図るようにすること。
「保育所保育指針」(平成20年3月)
第4章 1の(3)のエ
(ア) 子どもの生活や発達の連続性を踏まえ、(中略) 小学校との積極的な連携を図ること。
「小学校学習指導要領」(平成20年3月)
第1章 第4の2
(12) (略)、小学校間、幼稚園や保育所、中学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図る(後略)。

社会的な背景として、小学校低学年の子供たちに授業中の落ち着きの欠ける行動が見られるなどいわゆる

小1プロブレムの報告が増えたこと、また、幼児期から初等、中等、高等教育へより体系的に学びを連続させることの必要性が強く認識されるようになったことなどが挙げられる。

2 連携から接続へ発展するステップ

また、文部科学省が設置した「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」は、報告「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」において、連携から接続へ発展する過程の大まかな目安を次のように示している⁴⁾。

ステップ0 連携の予定・計画がまだ無い。
ステップ1 連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
ステップ2 年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を意識した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ3 授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を意識した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ4 接続を見通して編成された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

* 弘前市立福村小学校
Fukumura Elementary School, Hirosaki
** 弘前市立城西小学校
Jousei Elementary School, Hirosaki
*** 船沢保育園
Funazawa Nursery school
**** 弘前大学教育学部保健体育講座
Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University

そして、「各教育委員会等がリーダーシップを発揮」する必要性をうたっている。小学校は公立が多く教育委員会が所管するが、幼稚園や保育所は私立が多く市長部局が所管するケースが多い。そのため、行政機関においても連携が必要とされる状況にある。

3 H市における経緯

H市においては、平成21年度の段階で、多くの小学校が、幼稚園及び保育所と就学児についての情報交換を実施していた。また、生活科の学習で幼児を招待するなど、子供同士の交流を行う小学校も見られた。前述の「連携から接続へ発展する過程」においては、ステップ2の段階にある学校が多い状態と言える。しかしながら、学級編成を行うための情報交換として小学校が必要に迫られて行う関わり方であるため、幼保と小学校の相互にメリットがある連携とはなりえておらず、ステップ2とはいえその入り口の段階にあったと言える。

H市教育委員会教育研究所（現「教育センター」※平成24年度変更）では、毎年度実施していた「幼稚園教育研修会」の内容に、平成21年度から幼保小連携に関わる内容を取り上げ、対象者に小学校教員を加えた。また、平成23年度には保育所職員も対象に加えた。

しかし、小学校教員の研修会参加者はごく少数であり、幼稚園や保育所からの参加者から「学校に対して敷居が高い。見えない壁がある」「話し合う場を設けてほしい」「視点が異なる」などの声が挙がっていた⁵⁾。小学校現場では、幼保小連携の必要性や重要性の認識が高まってはいなかったと言える。

そこで、H市教育センターは、幼保小の相互理解の促進、連携、学びのカリキュラムの在り方について研究し普及・啓発するため、平成24年度、幼保小連携調査研究事業を立ち上げた。幼保小連携調査研究委員会を設置し、研修会の名称を「幼保小連携教育研修会」に変更した。

4 本稿の趣旨

H市教育委員会教育センターでは、平成25年度から平成26年度までの2年間、幼保小連携調査研究事業の推進に取り組んだ。平成27年度からは、F小学校教頭として学校現場における学校運営の中で、幼保小の連携、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の取組に当たっている。

本稿においては、その中で、特に平成25年度の教育行政における幼保小連携調査研究事業推進の取組を振り返り、H市全体における啓発・普及の成果と課題を

検証し、今後の展望を明らかにしたい。

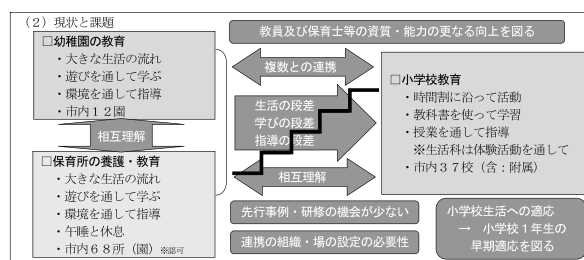
II 調査研究事業の整理及び調査・研究の方向付け

平成24年度は、1年次として、様々な課題や連携・接続の在り方について模索し、「幼児期に育てたいことの共通理解」や「スタートカリキュラムによる指導」の必要性などが確認されていた。

2年次である平成25年度は、まずはそれらを整理し、調査・研究の方向を明確にすることが必要であると考えた。以下のように、①幼保小連携の現状と課題の整理、②調査・研究の課題の整理、③連携の在り方の整理、④接続の在り方の整理をし、向かうべき方向を明確にした。

1 幼保小連携の課題の整理

現状と課題を確認することが必要であると考え、前年度の調査研究委員会における意見交換や幼保小連携教育研修会の参加者のアンケートから浮かび上がった課題を整理した。平成26年度始めに、まとめて示した。（資料1）



資料1 幼保小連携の現状と課題⁶⁾

(1) 各機関の相互理解の不足

① 幼保と小学校の相互理解、幼保の相互理解

幼保小教育研修会における参加者のアンケートから、「義務教育と視点が異なると感じた」「見えない壁があるように感じる」「現場を見る機会を増やしたい」「話し合いの場を増やしてほしい」など、相互理解の必要性に関わる声が出ていた。

② 幼保から送付された要録の写しの活用

保育所保育指針の改定に伴い、保育所から保育所児童保育要録を小学校に送付することが義務付けられた。保育所は、事務量が増え、小学校の反応が小さかったので、どのように活用されているのか疑問の声が多かった。

(2) 複数の相手先との連携の必要性

幼稚園、保育所には学区がないため、小学校とは、互いに広い範囲で複数の相手先と関わる必要がある。また、年度によって相手先が異なる場合もある。H市には、幼稚園12園(平成24年度当時)、保育所68園

(平成24年度当時)、小学校37校(平成24年度当時)あり、「20か所以上の幼保から入学する」「10校の小学校との連携は難しい」などの声が出ていた。

(3) 幼児期から小学校へかけての段差の大きさ(生活、学び、指導)

幼稚園、保育所における教育は遊びや環境を通して指導されるが、小学校では時間割の中で45分間の授業で、教科書等の教材を用いて指導する。午睡もなくなる。集中力の持続が難しくなる。

(4) 子供の小学校生活への早期適応を図ること

各園・所における方針や指導の違いによって児童の実態や状況にばらつきがあり、小学校入学当初の指導に配慮が必要である。幼児期の教育からの円滑な接続を図るため体系的・系統的指導が求められる。

(5) 連携の組織・場の設定の必要性

連携するための組織や場が設定されていない幼保小が多く、交流そのものを開始するきっかけを作ること

ができないている場合がある。

(6) 先行事例・研修の機会の少なさ

市内における先行事例が少なく、研修の機会も少ない状況である。H市教育センターの幼保小連携調査研究事業、幼保小連携教育研修会が貴重な場となっている。

(7) 教員及び保育士等の資質・能力の更なる向上

それぞれ各機関で研修等を行ってはいるが、教員及び保育士等の資質・能力の向上を継続的に図っていく必要がある。

2 調査研究の課題の整理

前述の課題及び前年度までの調査研究委員会における意見交換から、事業及び調査・研究の課題・内容を、三つに整理した。

- (1) 相互理解
- (2) 連携の在り方
- (3) 円滑な接続の在り方

<p>①相互理解 幼稚園、保育所、小学校教職員による就学前教育と小学校教育についての相互理解の促進を図る。</p>	<p>②連携の在り方 就学前教育から小学校教育への円滑な接続を図るための連携の在り方について調査・研究をする。</p>	<p>③円滑な接続の在り方 就学前教育から小学校教育への円滑な接続を図るための接続の在り方(カリキュラム、指導内容や方法)について調査・研究をする。</p>
--	--	---

資料2 幼保小連携調査研究事業の事業・調査・研究課題・内容⁶⁾

3 連携の在り方の整理

幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るための連携の在り方について、三つに整理した。(資料3)

- (1) 子ども同士の交流
- (2) 教職員同士の交流・連携
- (3) カリキュラムの接続

「子ども同士の交流」は、学校現場における取組に

相手先との連携が必要」、つまり「幼保に学区がないため、広い範囲で多数の相手と関わる必要がある」ことから、市全体で指針となるものが必要であり、それを作成して示すことこそ幼保小連携調査研究委員会ではできないことであると確認した。

4 接続の在り方の整理

幼児期の教育から小学校教育への接続の在り方として、次のように整理・確認をした。

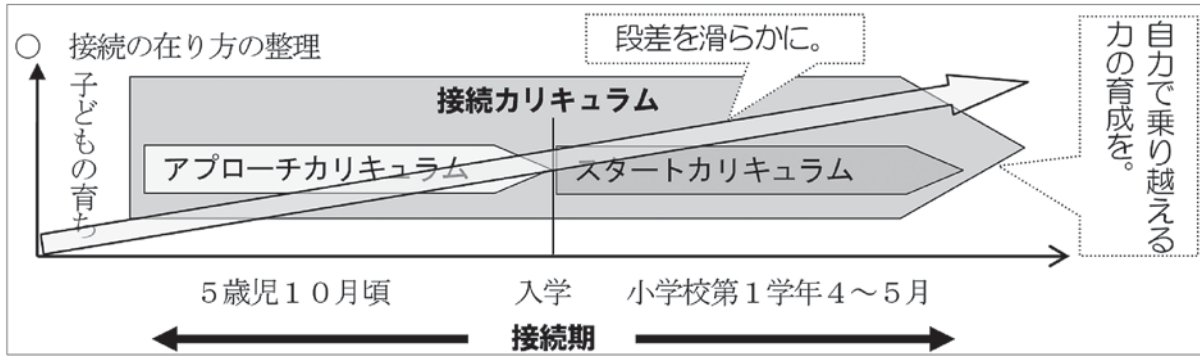
- (1) 5歳児後半期から小学校第1学年4～5月を、「接続期」というつながりで捉える。
- (2) 幼稚園・保育所の子どもの学びを、小学校教育へつなげていくためのカリキュラムとして「アプローチカリキュラム」と捉える。
- (3) 小学校生活に適応が図られるよう工夫した生活科を中心とした合科的な指導の計画を、「スタートカリキュラム」とする。
- (4) (2)と(3)をまとめて「接続カリキュラム」とする。(資料4)

○ 連携の在り方を三つに整理	
① 子ども同士の交流	「幼児と児童の交流の機会」の設定 (例) 行事への参加、授業の参観や「会」への招待 → 不安や「悪い」軽減、関わる力の育成
② 教職員同士の交流・連携	教育内容や子どもの育ちの「相互理解」「情報交換・共有」 (例) 授業参観、合同研修会、情報交換・共有の場の設定 → 互いの指導力向上、発達や学びの捉え方の理解
③ カリキュラムの接続	幼児期の学びや生活体験が、小学校での学習や生活へスムーズに接続するための「指導計画」 → 連続性・一貫性のあるカリキュラムの教育活動

資料3 幼保小連携の三つの在り方⁶⁾

なる。また、「教職員同士の交流・連携」は、各幼保小現場における取組のほか、幼保小連携調査研究委員会の委員相互の意見交換、教育センターが開催する「幼保小連携教育研修会」で進めることができる。「カリキュラムの接続」は、各幼保や小学校による指導計画によるものではあるが、前述の課題「(2) 複数の

III 幼保小連携教育研修会の開催(平成25年8月6日) 第1回調査研究委員(平成25年5月20日)の意見交

資料4 幼児期の教育から小学校教育への接続の在り方⁶⁾

換並びに教育委員会事務局及びT調査研究委員長（平成25年度）との相談を経て、以下の内容で実施する計画を立案した。

- ・全体テーマ「幼保小の連携の在り方を探る～それぞれの立場でできることは?～」
- ・オリエンテーション 教育センター指導主事 成田頼昭
- ・実践発表1「スタートカリキュラムの作成と実践」
J小学校 教諭 山田 ゆかり
- ・実践発表2「小学校への接続を意識した保育活動」
F保育園 園長 若林 一哉
- ・グループ協議 各グループに、幼稚園、保育所、小学校の教職員を配置する
- ・指導助言

1 テーマ設定の意図

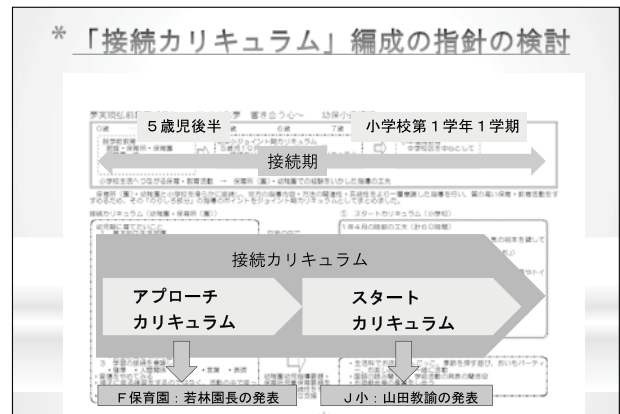
調査研究委員会における幼保小それぞれから集まった委員の意見交換から、相互理解の前提条件として、まずは各機関が自身でできることを考えることで、相手に求めるだけでなく、建設的に関わろうとする雰囲気をつくる必要性を強く実感した。また、接続を意識したカリキュラムによる教育活動を広めたいと考えた。そこで、「幼保小の連携の在り方を探る～それぞれの立場でできることは?～」を全体テーマに設定した。

2 オリエンテーション

開会行事後、すぐに実践発表に入るのではなく、H市の幼保小連携充実のための調査研究の推進に当たって、実践発表がどのようなねらい、位置付けにあるのかを参加者に意識付けるべく、オリエンテーションにおいて、幼保小連携の必要性や教育センターの取組や考えをスライドで示し、二つの実践発表が、それぞれアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムに位置付けることを明確にした。

3 実践発表1「スタートカリキュラムの作成と実践」

J小学校は、幼保との連携を重視してきた学校であ



資料5 「幼保小連携教育研修会」オリエンテーションのスライドから

り、S校長（当時）が年度始めの職員会議で「J小学校スタートカリキュラムについて」を全教員に配布し、1学年だけでなく2学年以上でも第1週目の「学年スタートカリキュラム」の作成・指導を呼び掛けるなど、先進的に取り組んでいる学校であった。

(1) 発表の概要

1学年主任としてスタートカリキュラムを作成・実践した取組とその成果と課題を発表した。資料6は、発表資料の一部である。

(2) 実践発表1に対する考察

実践発表1からは、次のように考察した。

- ① 幼児期の育ちと学びを踏まえて小学校生活に適應するためのスタートカリキュラムを編成して指導することは、子供が安心して楽しく小学校生活を始めることにつながり、円滑な接続が図られる。
- ② 45分間の授業時間にとらわれず、時間割を15~20分間のモジュールで構成することで、子供の集中力の持続に配慮することができる。
- ③ 「はじめましてがっこう」「はじめましてともだち」「ともだちつろう」「はじめましてみなさん」など、一週間ごとにねらいをテーマとして設定し提示することで、主体的な活動を促すことが

できる。

- ④ 1校時に幼保で親しんできた遊びや友達と楽しく交流する活動の時間を設定することで、朝に楽しい気持ちで学校生活を始めさせることができる。また、生活科を中心とする合科的・関連的な指導の時間を設定することで、子供の思いや願いを大切にしたい指導が可能となる。その上で、教科を中心とした学習の時間を徐々に増やしていくことが有効と考える。
- ⑤ 週案形式での指導計画作成は、実用的であり活用しやすく、改善のための記録を残しやすい。

- ⑥ 1学年担任に加え、教務主任を中心に協力体制を組んで指導したり情報交換したりすることで、学年全体の子供を複数教員の目で見守り、実態を把握して日々の指導に生かすことができる。
- ⑦ これらの取組の実施に当たっては、J小学校のように、管理職のリーダーシップにより学校全体で取り組むことが重要である。
- ⑧ 4月担任決定後に作成・準備することは時間的に厳しい。共通理解、編成を前年度から計画的に準備し、改善を加えていくサイクルが求められる。

4 実践発表2「小学校への接続を意識した保育活動」

① 全職員で共通理解を図ったこと

1. J小学校スタートカリキュラムについて

<全職員で共通理解を図ったこと>

(1) ねらい

- ・幼・保・小連携により、小学校への緩やかな接続を意図する。
- ・形の接続ではなく、精神的なかかわり、入り方の接続である。
- ・最終的には、小学校の生活リズムや内容に、形の上でも心の上でも慣れて適応できるようにする。形を揃えることを優先するのではなく、心を揃えていく。
- ・連休明け、運動会明けに、緊張の糸が切れて、キレたり、リズムを崩したりする子どもを作らないようにしたい。

(2) スタートカリキュラムの作成にあたって

- ① 何週間を目安に行うか考える。
- ② どんな内容のカリキュラムを組むかは、どんな力を付けさせるかにつながる。
- ③ 一週間ごとに決めて決めて、子どもたちがめあてを意識して生活できる。(はじめまして学校、友だち作ろう、学校大すき、自分のことは自分で、春をさがそう、など)
- ④ 朝の1時間目、学年で〇〇タイムとして行う。(1名サポーターとして入る。) ※一日1時間は学年タイムを入れると、学年で子どもを育てる意識につながる。
- ⑤ 2時間目以降も、スタート生活、スタート国語、などとして、15分か25分のモジュールを入れて、合科スタイルをとる。
- ⑥ 週ごとにスタート△△の時間を徐々に減らして、学級ごとに自立してできるようにする。
- ⑦ 必要などころで、子どもたちの精神的なケア、支援としてサポートを入れる。 ※学年タイムだけでなく、学級でも給食時間や下校時など、必要な時に必要な人数を入れる。
- ⑧ 遊びの活動や音楽、お絵かき、言葉遊びなど、幼・保での活動を取り入れて、少しずつ小学校の内容に整えていく。

(3) その他

- ・今年度やってみて、成果と課題からまた来年度工夫していく。
- ・2学期の始まりの時も、1週間のスタートカリキュラムを考える。

② スタートカリキュラムの実際 (一部)

2. スタートカリキュラムの実際

学校大すき! <スタートカリキュラム>

時間		8(月)	9(火)	10(水)	11(木)	12(金)
8:30 ~	1	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察
9:40 ~	2	歌・リズム遊び ・ミニゲーム(けんけんなど)	・整列 ・総力検査時 の約束	歌 ・リズム遊び ・体を動かすあそび	学校探検 その2 ・特別教室 ・宿舎 ・職員室 ・校長室	
9:25	4	トイレの使い方	・歌	・お話を聞いて ・総力検査 (1の1) 男女別	・どうぶつらしく ・自分の顔	
9:30 ~	5	入学式	学校探検 その1 ・1階・2階 ・ロッカー→下足箱の使い方 ・廊下歩行時の約束	・お話を聞いて ・総力検査 (1の2) 男女別	・どうぶつらしく ・自分の顔	
10:15	7				・新わたんは話 新かきや めし屋(など)	かけるかな ・筆算の確認 ・鉛筆の持ち方・姿勢 ・紙の確認 ・自分の名前書き
10:35 ~	8	・エプロンの確認 ・下校準備	学級活動 ・結晶について	学級活動 ・エプロンの確認	ううじ ・教科書の確認	
11:20	10				・歌遊び	
11:25 ~	11	・お食確認 ・下校時の約束	給食指導 ・準備 ・給食 ・食卓 ・歯みがき指導	給食指導 ・準備 ・給食 ・食卓 ・歯みがき指導	給食指導 ・準備 ・給食 ・食卓 ・歯みがき指導	
12:10	13					
その他						
時数集計		音楽1(1) 体育1(2) 生活1 学芸2	音楽1(1) 体育1(2) 国語1 学芸2	音楽1(1) 体育1(2) 国語1 算数1 学芸1	生活1 国語2 学芸1	生活1 13:30~ 内科・保健 確認
下校時		11:55	12:00	12:20	12:25	14:15

学校大すき! <スタートカリキュラム>

時間		15(月)	16(火)	17(水)	18(木)	19(金)
8:30 ~	1	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察
9:40 ~	2	歌・リズム遊び ・体をほぐし	歌・リズム遊び ・体をほぐし	歌・リズム遊び ・体をほぐし	歌・リズム遊び ・体をほぐし	歌・リズム遊び ・体をほぐし
9:25	4	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム
9:30 ~	5	・えんぴつ持ち方 ・線の練習 ・視力検査 (1の1)	・漢字の歩き方 ・種紙の仕方	・あいさつ ・読書の練習	・学習のルール	・集団活動の練習 ・なわとび遊び
10:15	7	・時間割の見方				
10:35 ~	8	・えんぴつ持ち方 ・線の練習 ・視力検査 (1の2)	交通安全教室	・身体測定 (1の1)	・自己紹介カードを書こう	2年生と一緒に学校探検
11:20	10	・時間割の見方		・身体測定 (1の2)		
11:25	11	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導	

③ 成果と課題

3. 成果と課題

<成果>

- ・1時間目にワークスペースで過ごす楽しい時間を設定したことで、朝から「今日は何かなあ。」と子どもたちも楽しみにしていた。
- ・遊びの要素を多く含んだ活動を多く取り入れながら4週間を過ごしたことで、楽しみながらも少しずつ学校生活に慣れさせることができた。
- ・2クラス合同で活動する時間を毎日設定し、学年間の交流を深めることができたので、5月以降の運動会の練習、社会見学、合同体育などをスムーズに行うことができた。
- ・一週間ごとにめあてを持って計画を立てたことで、向かう方向がはっきりして取り組みやすくなり、できなかったことは無理せず次の週に持ち越すことが可能であった。
- ・指導者3人が交代で指導にあたり、38人の子どもたちを見ることで、子どもたちは困った時に相談できる人が担任以外にもいる安心感が得られたと思う。担任もあせらずじっくりと自分のクラスの子どもの様子を見取ることができるので、心に余裕を持つことができた。
- ・お互いのクラスの実態がわかり、担任同士で情報交換をスムーズに行うことができた。

スタートカリキュラムは、

子どもも安心・保護者も安心・先生も安心

みんな安心プログラム

<課題>

- ・1年担任は4月に決まるので、スタートカリキュラム作成の時間を十分に取ることが難しい。
→ 学校としてスタートカリキュラムを職員会議の案件にして、3月中に共通理解を図る場を持つ。
- ・幼稚園や保育園の様子がわからない。(どのように1日を過ごしているのか)
→ 前年度の冬休み中に全職員が4つの幼稚園・保育園へ出かけ、見学と情報交換を行っている。
- ・4月中に幼稚園や保育園の先生と引き継ぎができれば、と思うが時間的に難しい。
→ いつでも連絡のとれる体制が望ましい。
- ・幼稚園・保育園の先生との活動内容の情報交換・連携の確保をしていきたい。

参考文献 木村吉彦監修 仙台市教育委員会編 「スタートカリキュラムのすべて」

資料6 実践発表1の資料 (一部抜粋)⁷⁾

① 幼児期と児童期：小学校の違い

学びの違い

- 学びの中での学び
- 時間の区切りが緩やかな生活
- 5領域の総合的な指導

幼稚園
保育園

一日の生活の違い

就学に向けた育ちの形成

3月卒園⇒4月から小学校生活

↓

数週間で生活を一変しなければならない

幼稚園・保育園で基本的な生活習慣・学習する姿勢・態度を身につけよう

② 年長児の就学を意識した保育のねらい

年長児の就学を意識した保育のねらい

5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
あひだつは、何と進んでいるか考えてみるように促す。										
お友達の話を聴き方を見につける。										
時の概念を明確に習得し、メリハリをつけて行動できるようにする。										
姿勢姿勢を身につける										
話を聞かせる、姿勢が整った中に行う。										
自分の名前が分かるようにする。										
文字・図に意味を付けるようにする。										
小学校のイメージ作り										
小学校の役割										
保護者の連携										

③ 各月の保育活動で（一部）

小学校のイメージづくり(7月～)

SSRカードを使用して、小学校生活の様子をシミュレーションをする時間を作る。その後、日常の保育の中で場面に応じて、小学校を模した行動がとれるような声掛けや活動を行っていく。

紙芝居や絵本でも、小学校へ向けての活動があるが、フィクションや異世界の設定であるため、イメージに育つと思われ、このイメージを自分の生活ではなく、自分が実際に行動しなければならないことが、関わるため、自分の学校生活に置き換えていく。

時間の区切りを理解(9月～)

時の概念を明確に習得し、メリハリをつけて行動できるようにする。

・活動の始まりと終わりに音楽をかける

資料7 実践発表2の資料（一部抜粋）⁸⁾

(1) 発表の概要

平成24年度から幼保小連携調査研究委員会の委員を務め、調査研究事業の趣旨や方向性を踏まえた上で、「小学校への接続を意識した保育活動」のテーマで取組を発表した。以下は、発表資料の一部である。

(2) 実践発表2に対する考察

実践発表2からは、次のように考察した。

- ① F 保育園は、F 小学校の向かいに立地し、卒園児のほぼ全員が同小学校に入学する。たいへん連携しやすい立地、環境にあり、子供同士の交流活動や教職員の連携も根付いている。本実践によって、育ちや学びの接続の円滑化がより図られた。双方にメリットが大きく互恵性のある取組であった。
- ② 小学校入学直後に子供が直面する小学校生活への段差を見越し、年長児の一年間のスパンで指導する内容を意図的、計画的に指導している。
- ③ イラストカードを提示することで小学校生活の様子をイメージさせ、小学校入学を意識して活動や遊びに取り組みせ、計画的に小学校に向けて学び

の基礎を身に付けさせていくよう仕組まれている。

- ④ 各月の重点事項を明確にすることで、中期的な目標をもって活動に取り組ませることができる。
- ⑤ 設定されているねらいの内容が、生活上の自立に関することが中心となっているが、通常の保育計画と一本化し、人との関わり（先生、友達、集団との関わり）、協同性の育ちを意図する内容を取り入れることで、より豊かな活動が構成され、更に充実した計画となる。

5 協議会

本研修会の参加者は、84名であった。内訳は、幼稚園長及び教員13名、保育所長及び保育士57名、小学校教員14名。実践発表後、グループ協議及び全体協議を行った。

(1) グループ協議

小学校区近辺の幼保小教職員を混ぜて6人組み14グループを作った。意図は、幼保小連携の課題の一つである相互理解を促進することであり、顔の見える連携・交流につながればよいという願いを込めた。

協議の柱は、①J小学校の実践発表について、②F保育園の実践発表について、③幼保小連携でそれぞれの立場でできることとした。司会者、記録者を各グループで立てたが、それぞれ活発な話し合いがなされ、意見・情報交換の貴重な場となった。事後のアンケートの自由記述では、参加者84名中17名(約20%)がグループ協議の意義を感じていた。中には、これを機に連携を始めようと確認し合う保育所と小学校もあった。幼保小連携の意欲付けやきっかけづくりに結びつく研修会の内容、運営方法であったと言える。



図1 グループ協議の様子

明確にした。

3 公開保育活動「小学校への接続を意識した保育活動」

「文字に興味を持たせる」ことをねらいとし、提示した「家の絵の扉」を開けて出た「一文字カード」を読み上げたり、それが頭文字となる言葉のクイズに答えたり、4枚のカードを並べ替えて言葉を作ったりする「文字遊び」の活動が公開された。

8月の研修会でW園長が示した「年長児の就学を意識した保育のねらい」に基づき、活動の中で、椅子への着席や話し手を見て最後まで聞くこと、音楽で活動終了として時間を意識付けることも配慮されていた。



図2 公開保育活動の様子

IV 実践研究会の開催(平成25年11月21日)

第1回調査研究委員(平成25年5月20日)の意見交換で必要性が浮かび上がった実践研究会を、F保育園において以下の内容で実施するよう計画した。

- ・全体テーマ「幼保小の連携の在り方を探る～幼保小の相互理解～」
- ・教育センター 指導主事 成田頼昭
- ・保育活動公開「小学校への接続を意識した保育活動」
F保育園 年長組 保育士 E氏
- ・研究協議会 全体会
- ・指導助言

1 テーマ設定の意図

幼保小連携の課題の一つである相互理解を促進することを意図し、「幼保小の連携の在り方を探る～幼保小の相互理解～」を全体テーマに設定した。保育活動を実際に参観し、意見交換をすることが、相互理解に最も有効であると考えた。

2 オリエンテーション

8月の研修会同様、弘前市の幼保小連携充実のための調査研究推進に当たって、本実践研究会がどのようなねらい、位置付けにあるのかを参加者に意識付けるため、オリエンテーションで幼保小連携の必要性や教育センターの取組や考えをスライドで示し、続く公開保育活動が、接続カリキュラムのうちのアプローチカリキュラムにおける保育活動の一環に位置付くことを

4 研究協議会(全体会)、指導・助言

本研究会の参加者は、62名であった。内訳は、幼稚園長及び教員6名、保育所長及び保育士33名、小学校教員23名。会場や駐車場のスペースを考慮し、各校園所1名のみとして参加者を募った。保育活動公開後、F小学校体育館に移動し、全体会として研究協議会を行った。協議では、公開保育に対する質疑応答や意見交換、情報交換がたいへん活発に行われた。

5 実践研究会に対する考察

小学校では、研究授業が各学校や小教研等で行われるが、保育所においてはそれほど実施されていないと思われる。ましてや公開となると実施されたことはほとんどなく、貴重な研修の場となったと言える。

公開された保育活動「文字遊び」は、保育所保育指針の5領域における「ウ 環境」の「③ 身近な事物を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする」に関わる内容であった。E保育士は、笑顔で受容的な雰囲気をつくり、子供たちにあたたかい関わり方でクイズやカードの並べ替えなど工夫のある展開をし、子供たちの文字や言葉に対する興味・関心を高めていた。その中で、夏の研修会でW園長が示した「年長児の就学を意識した保育のねらい」から、椅子に着席して活動すること、話し手を見て最後まで聞くこと、音楽で活動終了として時間を意識付けることの3点を意図した

働き掛けをしていた。子供たちは、座って指導者の話を聞き、挙手をして発表したり友達の発表を聞いたりし、集団としての活動が十分成立していた。

これらにより、幼保教員等に対して、小学校への接続を意識した保育活動の重要性について啓発する機会となった。また、小学校教員は、保育所の保育活動を参観することはまれであり、幼保との連携や、幼保からの成長を踏まえた教育活動の必要性について啓発する機会となった。

「百聞は一見にしかず」と言われるが、保育活動を実際に参観し協議をしたことによって、幼保小の相互理解が促進されたと言える。幼保小連携、接続カリキュラムの必要性の普及・啓発につながったと言える。

V 調査研究事業の取組を基にした小学校への働き掛け

ここまでの調査研究事業の取組を踏まえて、学校指導課から指導行政として次の働き掛けを行った。

- 1 「幼稚園及び保育所等との就学児に関する情報交換の実施並びに幼稚園幼児指導要録及び保育所児童保育要録の活用について」の説明・通知（平成26年1月11日）

幼保と小学校の間で、必ずしも就学児についての情報交換を行っているとは限らないことが分かったため、「在籍している全ての幼稚園及び保育所等との情報交換を」実施すること（指示事項）を、校長会議で説明の上、文書通知した⁹⁾。

- 2 幼稚園幼児指導要録及び保育所児童保育要録の写し等の活用（平成26年1月11日）

幼保から送付される要録の写し等について、「当該就学児の発達や指導・保育等の記録を踏まえて小学校入学後の適切な指導を行うための参考資料として活用」すること（指示事項）を、校長会議で説明の上、文書通知した⁹⁾。

- 3 中間報告を受けての通知（平成26年3月28日）

調査研究委員長から教育長へ、平成25年度までの調査研究事業の成果等を取りまとめた「中間報告」を行っていただいた。それを基に、各小学校に対して、「自校の実態に応じたスタートカリキュラムの編成に努め、第1学年入学当初の指導について、小学校生活に早期に適応できるよう配慮」すること（努力事項）を通知した。「中間報告」は、紙媒体で配布するとともにH市教育委員会教育情報ネットワークにデータを掲載し、参照できるようにした¹⁰⁾。

VI 結果及び考察

平成25年度の取組によって、H市における幼保小連携の状況がどのようになったかを各種状況及び調査から考察する。

	幼稚園	保育所	小学校	その他	合計	備考
H21 幼稚園教育研究会	21	0	0	0	21	小学校への案内開始
H22 幼稚園教育研究会	16	0	4	0	20	
H23 幼稚園教育研究会	25	7	1	0	33	保育所への案内開始
H24 幼保小連携教育研修会	24	48	13	0	85	名称変更
H25 幼保小連携教育研修会	13	57	14	0	84	
H25第4回幼保小連携調査研究委員会(実践研究会)	6	33	23	0	62	各校・園・所1名
H26 幼保小連携教育研修会	20	53	39	2	114	

表1 研修会等への参加状況の推移（人）

1 研修会等への参加状況

平成21年度から幼保小連携に関する内容を取り上げ、小学校へも研修会の案内を配布し始めたが、参加者は0人、4人、1人とごくわずかであった。これは、現場の多忙感もあるだろうが「幼稚園教育研修会」の名称のため、内容が「幼保小連携に関わる内容」であっても自分事として捉えきれていなかったためと思われる。それは、平成24年度に名称を「幼保小連携教育研修会」に変えて13名に増えたことからもうかがえる。保育所も、案内を始めて2年目に、名称変更も伴って飛躍的に参加者が増えた。

平成25年度実践研究会の小学校教員の参加者が23人、平成26年度幼保小連携教育研修会は39名とそれまでより大幅に増えてきたのは、幼保小連携調査研究事業などによる啓発によって、小学校現場における幼保小連携教育や接続カリキュラム、スタートカリキュラムに対する意識が高まったことの表れと言える。

2 幼保小連携を実施した小学校

平成25年度までは、「幼児と児童の交流」「指導者間の交流・連携」「スタートカリキュラムの作成」の三つとも、実施した学校数が微増の状態推移してきた。しかし、本稿における取組の翌年度である平成26年度には、はっきりと増加していることが分かる。

指示事項とした「情報交換」を含む「指導者間の交流・連携」は、36校中就学児がない1校を除いて全ての小学校が実施した。努力事項とした「スタートカリキュラムの作成」は、中間報告を受けた後の通知が3月だったこともあり9校にとどまった。翌平成26年度は、11月の校長会議で説明の上、通知したので、平

	幼児と児童の交流	指導者間の交流・連携	スタートカリキュラムの作成	実施した小学校数	私立小学校数
平成23年度	19	16	4	19	37
平成24年度	24	16	5	24	37
平成25年度	27	19	6	27	37
平成26年度	30	35	9	35	36

表2 幼保小連携を実施した小学校（校）

成27年度の作成については更に実施校が広まったと思われる。

3 考察のまとめ

これらから、平成25年度の調査研究事業の取組とそれを基にした行政的働き掛けによって、H市における幼保小連携の必要性の啓発や各幼保小における具体的な取組が確実に広がったと言える。前述の「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」に示された「連携から接続へ発展する過程」において、多くの学校がステップ2の段階からステップ3の段階へ進み始めたと言える。

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」では、「各教育委員会等がリーダーシップを発揮」する必要性をうたっている⁴⁾。本取組のように、教育委員会が、幼保小連携調査研究事業として、幼稚園、保育所、小学校の教職員、保育所所管の部局員で構成する調査研究委員会を設置し、様々な意見交換から現状と課題、連携や接続の在り方を明らかにした上で実践に取り組み、その成果と課題を共有すること、それを基にした行政としての通知や働き掛けを各現場にしていくことによって、市全体に啓発・普及をし、連携の動きや接続を見通した教育課程の編成・実施の動きを作り出すことができる。

VII スタートカリキュラムの編成・実施に向けて

H市においては、スタートカリキュラムの編成・実施の取組が広がっているのは確かであるが、まだ手探りの段階にある学校が多いと思われる。そこで、H市全体における取組が更に充実・発展することを願って、各小学校でスタートカリキュラムを編成・実施するに当たって、その内容・構成、編成・実施の手順や留意点を整理して明らかにしたい。

1 スタートカリキュラムの内容

(1) 新しい環境へ適応する過程

人はどの成長段階においても、新しい環境で生活・学習を始めるに当たっては、「どこで、どうすればよいか」「誰とどう関わればよいか」「何をどうすればよいか」の三つの適応が必要になる。米澤は、「子どもたちは、これまで慣れ親しんだ幼稚園・保育所から小

学校への移行に際し、「物理的環境への適応、対人的環境への適応、社会文化的な環境への適応」の「順を追って新しい環境に適応していく」と述べている。この過程を考慮して、スタートカリキュラムのプロセスを考える必要がある¹¹⁾。

①物理的環境への適応

- ア 毎日使う身近な施設…下足置き場、1年生の教室、トイレ
- イ 関わりが多い特別教室等…職員室、保健室、体育館、図書室、音楽室、校庭の遊具 など
- ウ 関わりが少ない特別教室等…他学年の教室、家庭科室、図工室 など

②対人的環境への適応

- ア 同じ学級の友達や学級担任
- イ 同じ学年の友達や学級担任
- ウ 上級生や学校の先生方

③社会文化的環境への適応

- ア 外的枠組みへの適応…学校の規則や雰囲気、時間割に基づいた生活 など
- イ 遊び中心から学習中心への移行
- ウ 学習中心の時間割への適応

(2) スタートカリキュラムの内容・構成

スタートカリキュラムの内容・構成は、大きく次の三つで考えることができる。上記の過程を踏まえ、週単位でねらいを設定して内容を構成して、単元や学習活動を具体化する。

①安心感をもち、新しい人間関係を築いていくことをねらいとした学習

- ア 時間…朝の会から1時間目にかけて。
- イ 内容…幼児期に親しんできた遊びや活動、友達と仲良く交流する活動。
- ウ 効果…生き生きと楽しい気持ちで、1日の学校生活を始めることができる。

②生活科を中心とした合科的・関連的な学習

- ア 時間…15～20分のモジュールにして毎日学習、学習活動に応じて2時間続き。
- イ 内容…4月の最初の単元は、学校を探検する生活科を中核として、国語科や図画工作科などの内容を合科的・関連的に扱い、大きな単元を構成する。
- ウ 効果…自らの思いや願いの実現に向けた活動を、ゆったりとした時間の中で進められる。

③教科等を中心とした学習

- ア 時間…15～20分を一まとまりとし、複数の教科等や内容・活動を組み合わせ始める。

- イ 内容…教科書やノート、鉛筆などを使う学習、各教科のスタートにふさわしい内容や方法。
- ウ 効果…「勉強したい」という学習への憧れをから、学習への意欲付けができる。

2 スタートカリキュラム編成・実施の手順・留意点

(1) 学校の指導計画及び校内組織への位置付け

従来からスタートカリキュラムのような指導をしている教員はたくさんいるが、学校全体としての取組とし、PDCAのサイクルで組織的・継続的な指導に充実・発展させることが必要である。

①学校の指導計画

これまで行ってきた幼稚園や保育所と行っている情報交換や幼児児童の交流なども含め、幼保小連携の取組の全体像を構造化した全体計画、それらを時系列で示した年間計画を形に表す。

②校内組織

校長、教頭、教務主任、1年生担任、生活科主任、特別支援教育コーディネーターなどで組織する「スタートカリキュラム作成委員会」を設置し、準備することが望ましい。

または、これまで行ってきた情報交換、就学児の学級編成や教材選定、入学式計画・準備なども含めてスタートカリキュラムの編成を行うとより組織的な取組となる。

「入学式準備委員会」などの既存の組織がある場合は、それを生かしてスタートカリキュラムを作成することも考えられる。

いずれにしても、校務分掌に「幼保小連携担当」を位置付けることが必要である。

(2) 前年度中の計画づくり

4月に新年度が始まってから作成するのでは、担任に負担が掛かってしまう。前年度1～3月に作成することが大事である。現1年生で指導したスタートカリキュラムの記録と反省を基にしながら作成することで、時間的・資料的・PDCAサイクルの点で望ましい。

一度計画を作成した学校は、次年度の学校行事予定が明らかになり次第、取り組み始めるとよい。

これまで作成していなかった学校ほど、取り掛かりに当たっては、前年度中に取り掛かることが必要になる。万が一、前年度中にできなかった場合は、担任発表後、入学式までに、先行事例を参考にしながら第1週から第2週までも計画づくりに取り組むことが望まれる。

(3) 入学当初に身に付けさせたい力や習慣・指導内容を検討

入学時の子供たちは、発達や学びの個人差が大変大きい場合が多い。情報交換や要録等を活用して幼児期の学びと育ちの様子を理解した上で、入学当初に重点的に身に付けさせたい力や習慣、指導内容について、優先度を明確にして整理することが大事である。以下は、その例である。

①生活上必要な習慣や技能

- ア 下足箱やロッカーの場所を覚えて、ズックやランドセルを向きに気を付けて置くことができる。
- イ あいさつ（「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」など）ができる。
- ウ 学習用具の準備や片付け、整頓ができる。
- エ トイレの場所を覚えて、自分で用を足すことができる。
- ウ 自分の学級や名前をはきはき言える（「1年〇組です」「〇〇〇〇です。」）。
- オ 友達と協力して給食の準備や片付けができる。
- カ 遊具を使って安全に気を付けて遊ぶことができる。
- キ 友達と仲良く話したり遊んだりすることができる。
- ク 行き先が分かり、安全に気を付けて帰ることができる。

② 学習上必要な基本的な習慣

- ア 教科書やノート、鉛筆や消しゴムなどを机上に準備することができる。
- イ 人の話を、注意して最後まで聞くことができる。
- ウ 椅子に座って授業を受けることができる。
- エ 呼名されたら、「はい」とはきはきとした返事ができる。
- オ 決められた椅子の出し入れ方で立ったり座ったりすることができる。
- カ 自分の考えを「です」「ます」まで言うことができる。

(4) 時間割の工夫

スタートカリキュラムは、モジュールで構成する時間もあるため、見通しがもてるように週案の形式で具体化することが望ましい。

①学校行事等の位置付け

まず、日程を動かさない学校行事等を、日程表に優先的に位置付ける。その後に、学年・学級の指導計画を位置付けていく。

②週のねらい・テーマの設定

学校大すき！<スタートカリキュラム>			第2週			～はじめましてともだち～		
時間	M	15(月)	16(火)	17(水)	18(木)	19(金)		
朝 1	8:30 ~	1	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	
	8:40	2	歌・リズム遊び	歌・リズム遊び	歌・リズム遊び	歌・リズム遊び	歌・リズム遊び	
	~	3	体ほぐし	体ほぐし	体ほぐし	体ほぐし	体ほぐし	
	9:25	4	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム	集団ゲーム	
2	9:30	5	・えんぴつの持ち方 ・線の練習	・道路の歩き方 ・横断の仕方	・あいさつ ・返事の練習	・学習のルール	・集団行動の練習 ・なわとび遊び	
	~	6	・視力検査(1の1)		・検診の受け方			
	10:15	7	・時間割の見方					
3	10:35	8	・えんぴつの持ち方	交通安全教室	発育測定(1の1)	自己紹介カードを書こう	2年生と一緒に学校探検	
	~	9	・線の練習					発育測定(1の2)
	11:20	10	・時間割の見方					
4	11:25	11	給食指導 ・準備 ・給食 ・後始末 ・歯みがき指導	給食指導 ・準備 ・給食 ・後始末 ・歯みがき指導	給食指導 ・準備 ・給食 ・後始末 ・歯みがき指導	給食指導 ・準備 ・給食 ・後始末 ・歯みがき指導	2年生と一緒に学校探検	
	~	12						
	12:10	13						
その他			・視力検査	交通安全教室	発育測定		学校探検 眼科検診	
時数集計			音楽(1/3) 体育(2/3) 国語2 学活1	音楽(1/3) 体育(2/3) 生活1 学活2	音楽(1/3) 体育(2/3) 生活1 学活2	音楽(1/3) 体育(2/3) 国語1 学活2	音楽(1/3) 体育(2/3) 体育1 生活2	
下校時刻			13:20	13:20	13:20	13:20	14:00	

資料8 スタートカリキュラムの時間割(例)

物理的環境から対人的環境、社会文化的環境の段階で適応していくことを踏まえ、身近な教室から学校全体へ、身近な友達や先生との関わりから集団づくりへ、遊び中心から学習中心への段階を意識して、週単位でねらい・テーマを設定する。

<テーマ例>

- 4月第1週「がっこうだいすき！ はじめまして がっこう」
- 4月第2週「がっこうだいすき！ はじめまして おともだち」
- 4月第3週「がっこうだいすき！ ともだち つくろう」
- 4月第4週「がっこうだいすき！ はじめまして みなさん」

③幼児教育からの連続性に配慮した1校時

幼児期は自由遊びで朝の時間を過ごしていたことから、連続性に配慮し、次のようにして安心感をもたせ、楽しい気持ちで1日の学校生活を始めることができるようにする。

ア 楽しい活動の設定

- ・幼児期に親しんできた遊びや活動、友達と仲良く交流する活動を取り入れる。
- ・複数の幼稚園や保育所から入学してくるため、友達づくりの不安を解消する。

イ 「〇〇タイム」

- ・子供が親しみやすい名前を時間に付ける。
- ・朝の時間に固定・繰り返しで、安心感をもたせて適応を図る。
- ウ 複数の目で見守る体制
 - ・複数学級がある学校は、学年合同で行うことで学年の先生を自分たちの先生と意識付ける。
 - ・学校の協力体制を組み、年度当初は加配教員などが加わって一緒に指導・支援・活動する。
- ※給食時間や下校時など、必要なときに必要な人数を入れる。
- ④生活科を中心とした合科的・関連的な学習
 - ア 入学直後は、生活科「がっこうたんけん」を通して、教室や施設等の配置や学校生活のルールやマナー、友達や先生との関わりなどに関心をもたせ、小学校生活への円滑な導入を図る。
 - イ 活動が、教室から校舎、校庭へと広がっていくように計画する。
 - ウ 見つけたものを表現する活動で、国語科や図画工作科などとの合科的・関連的に指導する。思いや願いを生かした学習活動として構成し、体験がきっかけで他教科の動機付けとなる。
 - エ 「生活科+国語」「生活科+図画工作科」などと合科的指導にすることで、週3時間の生活科を毎日できるようにする。
- ⑤学びたい気持ちを大切に教科の学習

入学時にもっている鉛筆や教科書を使う学習への憧れを大切にし、教科のスタート学習として、その教科への興味・関心をもたせる内容から始めていく。

〈例〉「国語のスタート学習」の内容例

幼稚園・保育所における話し言葉中心の文化から、「読む」「書く」の書き言葉の文化にも子どもの力を広げていく導入となる。

- ・絵本の読み聞かせ…教師の近くに座らせて読み聞かせをする
- ・鉛筆の持ち方…図を提示し、正しい持ち方、書く姿勢を指導する
- ・自分の名前を書く…机に貼り付けておいた名前のラベルを手本に書かせる

(5) 指導の工夫

①視覚で捉えられる環境構成

ランドセルの片付け方、机の引き出しの物の置き方、一日の予定や活動の手順などを、文字や絵、写真などで掲示する。音声言語だけで十分に理解できない子供とともに、どの子にとっても分かりやすいユニバーサルデザインの環境づくりを心掛ける。

②具体的な指示

- ア 言語指示は、一つの指示で一つの行動にする。
- イ 「〇〇しない」よりは、「〇〇する」と動きやすい言葉で指示をする。
- ウ できたときには「そうです」「できました」と評価し認める。

③挙手・指名は段階的に取り入れる

最初は授業で挙手・指名という形が難しい場合がある。「分かった子は全員立ちましょう。」と立たせて順に言わせたり、自由に言わせてから教師が指名して言わせたりするなど、言いたい思いを満たさせながら、挙手・指名を徐々に取り入れていく。

④活動のメリハリ

集中して学ぶ活動と、発声・作業・運動など体を使う活動を取り入れてメリハリを付ける。

(6) 指導・支援の協力体制

- ①校内の全教職員が協力することで効果的に指導するために、「誰が」「どの場面で」「どのように支援するか」の共通理解を図る。
- ②保護者に対しても、学校生活への不安を解消し、理解と協力を得られるように説明をする。

(7) 検証・改善

- ①年度当初だけに限らず、長期休業明けの学校生活への適応にも生かすようにする。
- ②時期を捉えて、単元構成や指導計画、協力体制等に

ついて成果や課題、改善点を明らかにし、次年度のスタートカリキュラムの改善に生かす。

- ③校内のみならず幼稚園・保育所等の教職員と合同研修を行うことが有効である。

VIII まとめと今後の展望

1 まとめ

幼保小連携を推進するには、課題として、①相互理解、②連携の在り方、③円滑な接続の在り方を検討する必要がある。連携の在り方は、①子供同士の交流、②教職員同士の交流・連携、③カリキュラムの接続の三つに整理できる。カリキュラムの接続については、「接続期」を設定し、幼保の「アプローチカリキュラム」と小学校の「スタートカリキュラム」による教育活動によって、円滑な接続を図ることが有効である。H市においては、市教育委員会の調査研究事業とその成果を基にした行政通知によって連携の推進が図られた。

スタートカリキュラムの編成・実施に当たっては、学校の指導計画及び校内組織に位置付けて前年度から計画づくりに取り組むことが求められる。入学当初に身に付けさせたい力や習慣・指導内容を検討し、新しい環境への適応過程を考慮した上で、週案形式で、①学校行事等の位置付け、②週のねらい・テーマの設定、③人間関係を築く楽しい活動、④生活科中心の合科的・関連的学習、⑤教科のスタート学習で作成する。全教職員による協力体制を組み、PDCAサイクルで改善を図っていくことが重要である。保護者への説明や幼稚園・保育所等の教職員との合同研修も大事である。

2 今後の展望

アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムは各幼稚園、保育所、小学校が作成するが、広範囲で複数の相手先からの就学になるため市全体で進めることも求められる。また、各幼保小における取組も更なる充実が求められる。具体的には以下を提言したい。

(1) 行政の取組として

- ①「小学校入学までにできるようにしたいこと、身に付けさせたいこと」を整理してまとめたものを作成する。
- ②作成したものを、各幼稚園、保育所に配布し、幼児期の教育の啓発資料とする。
- ③作成したものを、市立小学校における就学時健康診断において、保護者への説明資料として活用する。これによって、どの小学校でも全ての就学児の保護

者へ啓発することができる。

- ④作成したものをそのままにせず、成果と課題を基に毎年見直しを図るようにし、幼保小の教職員が情報・意見交換をすることで連携を図っていく。
- ⑤「幼保小連携教育研修会」をねらいに応じて実施する
- ア スタートカリキュラム編成の普及、充実 → 小学校教員を対象にし、悉皆で実施
- イ アプローチカリキュラムの開発、普及 → 幼稚園、保育所教職員を対象にして実施
- ウ 「小学校入学までにできるようにしたいこと、身に付けさせたいこと」の改善
- (2) 各幼稚園、保育所、小学校の取組として
- ①幼稚園・保育所は、小学校の参観や交流を遠慮しないで働き掛けていく。
- ②小学校では、自校への就学する子供がいる幼稚園・保育所との連携・交流の全体計画及び年間計画を作成し、体系的・計画的に連携・交流を推進する。
- ③スタートカリキュラムは、前年度から編成する。学校としての基本的なスタートカリキュラムを編成し、誰が担任になっても活用できるようにしておく。

3 最後に

幼児期の教育と小学校教育を円滑につなぐためには、まず、各幼稚園、保育所、小学校が「地域で子供を育てる」という意識をもち、相互の教育活動を尊重・理解し合いながら連携・交流することが大切である。そして、各幼稚園、保育所、小学校において円滑な接続を図る接続カリキュラムを基にした指導をし、子供たちに「段差を乗り越える力」を育むことが重要である。幼児期の体験的な遊びや生活を通じた豊かな学びや育ちをベースにし、小学校で「楽しい」「友達ができた」「できる」「知りたい、やってみたい」という安心感、自信、意欲をもたせ、自立と成長を促すカリ

キュラムの工夫が求められる。

引用文献

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説（平成20年）』, 2008, p230
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針解説書（平成20年）』, 2008, p142
- 3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説総則編（平成20年）』, 2008, p71
- 4) 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（平成22年）」, 2010, p26-27
- 5) 弘前市教育委員会『弘前市幼保小連携調査研究委員会平成24年度の歩み』, 2013, p33-34
- 6) 弘前市教育委員会『弘前市幼保小連携調査研究委員会平成26年度の歩み』, 2015, p9-10
- 7) 弘前市教育委員会『弘前市幼保小連携調査研究委員会平成25年度の歩み』, 2014, p38-48
- 8) 前掲書7) p49-53
- 9) 前掲書7) p110
- 10) 前掲書7) p130
- 11) 木村吉彦監修、仙台市教育委員会『スタートカリキュラムのすべて』ぎょうせい, 2010, p17

参考文献

- ・無藤隆、安見克夫、和田信行、倉掛秀人、本郷一夫『今すぐできる幼・保・小連携ハンドブック』日本標準, 2009
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説生活編』（平成20年）』, 2008
- ・国立教育政策研究所教育課程研究センター『スタートカリキュラムスタートブック』, 2015
- ・和田信行『小1プロブレムを起こさせない教育技術』小学館, 2013
- ・川上康則「発達障害の子どもに合わせた丁寧な対応・支援が予防に効果的」(『総合教育技術3月号』小学館, 2014)

(2016. 1.18 受理)